

響く市民オペラ「虹の大橋」

音楽・美術 コース

松江開府400年祭のグランドフィナーレを飾り、松江市民オペラ「虹の大橋」がプラバホールで上演された。松江で初めての創作オペラは観衆を魅了した。



勝部さんの指導で、オペラの基本知識を学び、公演で共に歌おうと「松江賛歌」を練習した

鑑賞にあたり、事前に講師の勝部俊行さんと田中義浩さんから、オペラの基礎や鑑賞方法を聞いた。オペラは16世紀末にイタリアで生まれ、ヨーロッパで発達した。歌唱を中心に管弦楽の演奏によって構成される音楽劇作品である。オペラマリア（正歌劇）、オペラブッフ（喜歌劇）、楽劇、オペレッタなどの種類があり、虹の大橋は前半がオペラブッフ、後半がオペラマリアの特徴をもつ。



ストーリーを理解した上でオペラを鑑賞すると楽しさが増すと田中さん

虹の大橋

虹の大橋は水都松江のシンボルとも言われる大橋の架橋工事にまつわる人柱、足軽源助の悲話を題材にしたもの。国内外で活躍する地元出身のプロオペラ歌手、経歴廉彦、妻屋秀和を主要キャストに迎え、オーケストラを含め出演者をオーディションで選出、総勢170人を超える地元市民が出演した。上演時間約3時間の大作。プロとして活躍する2人を除き出演者には初のオペラ舞台。音楽経験者もオペラの発声は難しく、台詞も出雲弁。練習にも緊張感が漂った。



本番の舞台装置での練習。発声を一つ一つの言葉ごとに行われた確認し、演技指導が行われた

厳しい演技指導や歌唱指導が繰り返された。それでも本番の舞台では、出演者は臨場感たっぷりに表現力豊かに歌声を響かせた。エンディングでは出演者総出で観客と「松江讃歌」を歌い舞台と客席が一体となった。
「橋は単に町と町をつなぐだけでなく、人と人の心もつなぐ。人の絆が問われる今、松江発のメッセージとして全国で上演して欲しい」とある受講生は感動した様子で語っていた。（阿武・備谷）

講座 チャンスは不可能にあり

「目からウロコ」と題して、松江出身の画家で東京藝大大学院教授・宮廻正明さんから日本人の文化意識について講演を聞いた。



芸術には表と裏が同時に存在すると宮廻さん

「山陰は裏日本と言われる。広辞苑で『うら』をみると『心』という字が出てくる。裏日本は心の文化を持っている。その松江で育ったことは自分にとって大きな財産」と述べた。そして表と裏を持った日本の芸術が世界に誇れることを列挙した。
仏画は裏から色を付け、精神を

裏に閉じ込める。また、平面を立体に見る力があるのが日本人。法隆寺壁画でも一枚の顔に正面と斜面の視点を入れて、美しい形の絵に仕上げている。
現代はデジタル技術を用いて模写ができる。破壊された物や傷みのはげしいものもよみがえる。模写がオリジナルを越えた時に模写自体に芸術的価値がある。
物事は不可能を可能にするところにチャンスがある。「目からウロコが落ちる」と言う。ウロコが落ちるとスツキリする。だがウロコは誰にでも落とせる。何をスツキリさせるかに気付き、その落とすべきウロコを目に飛ばす発想こそが付加価値を生む。「目からウロコでなく、ウロコから目」のチャンスをつかむことが肝要だと語った。（備谷・和田森）

民話に見る故郷の教え

ふるさと発見 コース

山陰地方に伝え残っている民話研究の第一人者で、出雲かんべの里館長、酒井董美さんより「民話とわらべ歌あれこれ」と題し講義を受けた。



家族伝承を含め、民話の伝承者が減少していることが心配

民話（民間説話）とはその土地に伝わる神話、伝説、昔話、世間話の総称。昔話の「とんとん昔があっただけな

で始まる語り口が心を癒す。奥出雲に伝わる「若水汲み」を紹介し昔話の持つ意味を語った。
元旦の早朝、老婆が歳神に祈りつつ川で若水を汲む。その時、現れたフクロウ（ヨズク）に「われはヨズクか、わしや福ズクだ」と語りかけ言葉通りに幸せになる。それを聞きつけた隣の老婆は「福ズク」を「疼く」と言い間違え不幸になるといふ話。この中には「良い言葉を使えば幸せになり、悪い言葉は不幸になる」という言霊信仰。「鳥は神そのものという古代信仰」「若水は暗いうちにくむ、暗闇は人と神が交流できる時間」など昔話には教えがあると酒井さん。出雲地方のわらべ歌と共に紹介。「一つ一つの物語や歌の中にある文化を、これからもちくと伝承していくことが必要だ」と説いた。（阿武・和田森）

シニアいきがい コース

地域の味と伝統の技術

李白酒造：水は井戸水。冬が仕込みの最盛期



「李白酒造」と「カネモリ醤油」共に明治の創業で石橋町に在る老舗。味の文化を松江から発信し続けている。伝統技術を守りながら、さまざまな取り組みをする2社を見学し、培われた物造りの一端にふれた。（米井・日野）
追求する」と語る。出荷の40%を米国と香港を中心に輸出し、海外での和食文化を彩る。一方で「器の大きさや、口径によっても酒の味は変わる。料理に合う日本酒を提供したい」とワイン文化のヨーロッパ市場への拡大も目指す。

カネモリ醤油：ベンガラ色の建物が街の景観に溶け込む



工場では酵母の甘い息づかいを感じる。たもの熟成させている。蔵の中は薄暗く、柱や棟木にはカビがびっしり。発酵食品である醤油作りには欠かせない酵母菌は木桶や昔ながらの蔵に生きていて大切な味を作るといふ。衛生的な近代設備ではなくても酵母菌は強力な殺菌力を持っていて納得



また、酒粕をペーストにするレシピを披露。「このペー」ストは多くの料理に合うのでぜひ酒粕を活用して欲しいと話した。



酵母菌に囲まれ大量の木桶が並ぶ

松江開府400年祭
ボランティア活動

シニアいきがいコース

「松江開府400年記念博覧会へ参加してみよう」とお城の簡単なガイド研修を行い、9グループに別れて3ヶ月間にわたりボランティア活動を展開した。

松江開府400年祭の最終年。受講生は、ボランティア活動を通じて参加した。



訪れた人にチラシやパンフを配布

ボランティア活動内容 (松江城周辺にて)

カメラのシャッター押し
アップレクに同行
チラシ・パンフの配布
お茶席(本丸・呼び込み)
あっぱれステージ周り
階段上がり降りの介添え
簡単なガイド
水燈路の手伝い
武者行列の衣装の着付け



カメラのシャッター押しのサービス



水燈路の行灯並べと点灯の手伝い

おもてなしの心で縁づくり

事前に、松江開府400年祭事務局、NPO法人松江ツーリズム、興雲閣元館長・安部さんたちからレクチャーを受け3ヶ月間のボランティア活動を行った。

12月、活動を終えて発表会を開催。シャッター押しの活動では「シャッターを押すと多くの観光客からはありがとうの声、

皆さんと楽しく触れ合うことができた」。チラシ・パンフの配布では「チラシを渡すことで会話が弾み自然と笑顔になった」。簡単なガイドでは「道案内、イベ



ボランティア体験の感想を意見交換

ント紹介などおもてなしの心で接することができた」など各ボランティアから有意義な体験談が報告された。「今後、縁があれば積極的に参加したい」と多数の意見があった。(園・葛上・日野)

日韓 音の架け橋

音楽 コース

島大・藤井浩基准教授から韓国・朝鮮半島と日本との音楽交流の歴史や、それぞれの音楽の特徴について話を聞いた。

朝鮮半島との音楽交流の記録は5〜6世紀の内容が「日本書紀」に記載されており、正倉院には「新羅琴」が保存されている。韓国のカヤグム(伽倻琴)は、日本の琴と似ている。米子市での演奏会の映像をもとに、音の特徴や演奏方法の違いの説明を受けた。また、音楽の感じ方、とらえ方の日韓の違いの例として同じ西洋のメロディーの曲が日本では「蛍の光」となり韓国では一時期国歌として歌われていたことが紹介された。しかし、近代は韓国との間で文



チャンゴ(杖鼓)の音は雨を表現する

化交流も難しい時代が続いた。金大中大統領の時に日本文化が開放され、2010年から使っている小・中学校の教科書に日本の歌「さくらさくら」が初めて掲載された。これは画期的なことだと藤井さんは言う。さらに「春が来た」や童謡や民謡が教科書に載った。日本では1990年代に韓国の「アリアン」や「故郷の春」が教科書に載っている。音楽を通じた交流は進んできていると藤井さん。音楽がこれからの日韓の架け橋となることを願いつつ全員で「故郷の春」を韓国語で歌った。(中島・和田森)

美術 コース

古代意宇の国の中心地、東出雲町に古民家を利用した「いまみや工房」を構える三島耕二さん。その工房で器づくり体験を行った。

今回受講生が挑戦するのは、地元の土から採った1kgの粘土。丸棒でのばして皿を作る方法。または、指の太さくらいのも状にして、それを輪にして重ね合わせるように積



「好みの形に」と和やかな雰囲気
で作品づくりに取り組む受講生

自然の息吹を器に

み上げて器にする。どちらかを選びそれぞれの作業台へ。「形にとらわれず、自然の感じを大切に、手の感覚でなできるようにかたち作っていくのがコツ」と三島さん。思い思いの形を描き、練り上げていく受講生は、和やかな雰囲気にも表情は真剣。「頭で考えるのと、実際は違って苦労した。しかし、何を入れようかと想像がひろがり楽しい」と顔をほころばせる受講生。

「陶芸は自然からの贈り物が作品になる、自然と一緒に生きていける楽しさがある」と三島さんは話す。古民家の風を感じて作った、世界に一つだけの思いのこもった器。受講生は、焼き上がりに夢を膨らませ工房を後にした。(大田・和田森)

玄丹そばを打って味わう

ふるさと発見 コース

まつえそば打ち研究会の原さんの指導で「玄丹そば」を使用してそば打ち体験をした。玄丹そばは、幕末の松江藩を救った「玄丹お加代」と「米の減反」とを掛けて命名された地そばのこと。

そば粉500gに水250ccの割合で材料を準備。そば打ち開始。



水回しはすばやく!水を入れすぎない!と手さばきを指導する原さん



中へ中へと練りこむ。両手の使い方
苦戦してようやく円錐形に仕上げた

こね鉢にそば粉を入れ、水を半分投入して指を立てすばやく円を描くようにかき混ぜる。様子を見ながら少しずつ加水。やがてそば粉がくっつきはじめる。さらにかき混ぜる。慎重に一滴、二滴と加水。大きな塊が親指ほどになつてきたら加水は終り。小さな塊をまとめて表面につやがでるまで力強



割り子そばで舌鼓。そばの太い細
いがあってもおいしいと自画自賛

くこねる。のし板の上に打ち粉をふり、めん棒を転がしながらムラなく慎重に延ばし四角にする。三つ折りにしてこま板をあて包丁でまくように入れてゆで、冷水でぬめりを取り、盛り付けて完成。できあがり割り子そばで試食した。「失敗を恐れず何回か挑戦すればできるようになる」と原さん。「自分で年越しそばを打つぞ」と張り切る人もいた。(日野)

共通講座 島根大学管弦楽団 第57回定期演奏会



島根大学管弦楽団の定期演奏会が開催された。曲目はシューマンの交響曲第2番、八長調作品61とムソルグスキー作曲組曲「展覧会の絵」指揮は川添教授。学生たちの熱い演奏に大きな拍手が送られた。(備谷・坂本)

市から感謝状

松江開府400年祭への協力により、まつえ市民大学の「シニアいきがいコース」と「ふるさと探求コース」に対して感謝状が授与された。修了式で披露される。

ティータイトム

受講生の皆様

修了おめでとうございます!

今年度は、3・11の東日本大震災が発生し大変な年になりました。まつえ市民大学では募金活動、バザーの収益金を義援金として送り、「絆」の意味をかみしめた年でもありました。皆さんは市民大学を受講され、新しい出会い、ふれあい、学びあいがあり、記憶に残る一年を過ごされたと思います。広報紙「いかにい」も受講生の活動状況を取材し無事4回発行することができました。ご協力たいへんありがとうございました。みなさん、次年度も講座への参加をお待ちしています。(H) 編集担当まつえ市民大学レポーター

問い合わせ先
松江市民活動センター
まつえ市民大学事務局

TEL 0852(32)08994
TEL 0852(32)0847

メールアドレス
mcu@city.matsue.lg.jp